

GETTYSBURG ADDRESS の 邦訳について

松 田 福 松

1. 学問の本質

人生は不断の学問の場である。好むと好まざるとを問わず、われらは、この世に生きるかぎり、日々夜々、この学問の場から離脱することは出来ぬ。われらは不断の現実探求によって、世に充満し浮動する迷信と妄想との繫縛をきりそけ、あるがままの真実にみそぎして天真の生を生きねばならぬ。それが曾つてソクラテスが生きた“愛知者”の道である。そのためには、自己の全存在を投じて実人生の不可抗力に没入せしめ、痛酷無極の体験にわれとわが夢を破らねばならぬのである。単なる智識の集積や概念構図の構築には何の意味も存しないのであって、自己の全存在を傾けた体験によってこそ智識も始めて生命化され、一切の仮定概念を打破するところにこそ真の学問の本質が存する。

2. 批評の意義

迷信の打破が学問の本質であり、批評はその必須の方法である。古今東西の文化をその国民生活に摂取渾融し来った現代日本のわれらは、或いは商業的、或いは政治的意図に基く意識的謀略の国際的国内的宣伝に対しては勿論であるが、無自覚のうちに流布せらるる俗論通説の類に対しても、これを自己の全存在を傾けた体験に照して厳しく吟味し詳しく批評して行かなければならない。それは、われらが生の全的開展を碍ぐる一切の固定概念のしこりをとりのぞく必須の切開手術であって、自由なる生命の全的開展が必然に要求する知的作業

なのである。世には余りに多くの偶像が横行して居る。これを、あるがままの現実に照して破碎し、本来自由なる生命の全的開展を、その本来の自由なる姿にたもつのが、この批評の任務であり意義なのである。それ故、その対象は、必然、世の既成権威にとられねばならない。

3. Lincoln の Gettysburg Address

アメリカの国民的統一を固くし今日の繁栄の基礎を作った南北戦争中 Pennsylvania 州 Gettysburg の会戦は、北軍の勝利に一転機を画した大決戦であって、3日間に亘る大激戦に18州からの北軍将兵がここに35,000の戦死者を算したのである。これら将兵を葬るため、この戦場の1部17エーカーの土地をこれら各州の負担において購入、1863年11月19日にその記念墓地の dedication ceremonies が挙げられることとなった。この時 Edward Everett の2時間に及ぶ記念の Oration につづき、合衆国大統領として若干の appropriate remarks により此の地を聖域として正式に特設することを主宰者側から求められた Lincoln がおこなった僅か2分間足らずの式辞は、翌日の新聞に報道せられて全国民に忘るべからざる感動を与え、Lincoln's Gettysburg Address として、アメリカ史のみならず、全世界の歴史にも有数の名演説として今日に伝えられ、わが国の英語教科書にも必読の教材として広く用いられ、全国の高校生がこれを学んで居る。然るにこの千古の名演説の邦訳は、各人各様であって、これという定訳は見当らない。英語がこれだけ普及し、英語学もこれだけ精緻に研究されて居るといのに、この現状は遺憾の極みであって、日本人全体の——また特に英語に関係あるわれわれの——恥辱とさえ感ぜられる。以下少しくこの現状を分析して、幾分なりともこの恥辱の回復に資するところあらんとするものである。

4. 原文と訳文

いま一般に流布されている原文と訳文とをかかげよう。原文の方は Paul M. Angle 氏編集の *The Lincoln Reader* (Rutgers University Press 刊) の1947年版

から引用する——

Fourscore and seven years ago our fathers brought forth on this continent a new nation, conceived in liberty, and dedicated to the proposition that all men are created equal.

Now we are engaged in a great civil war, testing whether that nation, or any nation so conceived and so dedicated, can long endure. We are met on a great battlefield of that war. We have come to dedicate a portion of that field as a final resting-place for those who here gave their lives that that nation might live. It is altogether fitting and proper that we should do this.

But in a larger sense, we cannot dedicate ——we cannot consecrate——we cannot hallow——this ground. The brave men, living and dead, who struggled here, have consecrated it far above our poor power to add or detract. The world will little note nor long remember what we say here, but it can never forget what they did here. It is for us, the living, rather, to be dedicated here to the unfinished work which they who fought here have thus far so nobly advanced. It is rather for us to be here dedicated to the great task remaining before us——that from these honored dead we take increased devotion to that cause for which they gave the last full measure of devotion; that we here highly resolve that these dead shall not have died in vain; that this nation, under God, shall have a new birth of freedom; and that government of the people, by the people, for the people, shall not perish from the earth.

邦訳としては、東大教授高木八尺、斎藤光両氏の共訳になる「リンカーン演説集」(岩波文庫 5747—5748) の第 13 刷昭和 42 年版から引用する:——

八十七年前、われわれの父祖たちは、自由の精神にはぐくまれ、すべての人は平等につくられているという信条に献げられた、新しい国家を、この大陸に打ち建てました。

現在(いま)われわれは一大国内戦争のさなかにあり、これによりこの国家が、あるいはまた、このような精神にはぐくまれ、このように献げられた

あらゆる国家が、永続できるか否かの試錬を受けているわけでありませぬ。われわれはこの戦争の一大激戦の地で相い会しています。われわれはこの国家が永らえるようにと、ここでその生命を投げ出した人々の、最後の安息の場所として、この戦場の一部を献げるために来たのであります。われわれがこのことをするのはまことに適切であり適当であります。

しかし、更に大きな意味において、われわれは、この土地を献げる（デディケート）ことはできません——聖め献げる（コンセクレート）ことができません——聖別する（ハロウ）ことができません。生き残っている者と戦死した者とを問わず、ここで戦った勇敢な人々こそ、この場所を聖（きよ）め献げたのでありまして、われわれの微力をもってしては、それに寸毫の増減も企てがたいのであります。われわれがここで述べることは、世界はさして注意を払わないであります。また永く記憶することもないでしょう。しかし彼らがここでなしたことは、決して忘れられることはないであります。ここで戦った人々が、これまでかくも立派（ノーブリー）にすすめて来た未完の事業に、ここで身を捧げるべきは、むしろ生きているわれわれ自身であります。われわれの前に残されている大事業に、ここで身を捧げるべきは、むしろわれわれ自身であります。——それは、これらの名誉の戦死者が最後の全力を尽して身命を捧げた、偉大な主義（コース）に対して、彼らの後をうけついで、われわれが一層の献身を決意するため、これら戦死者の死をむだに終らしめないように、われらがここで堅く決心をするため、またこの国家をして、神のもとに、新しく自由の誕生をなさしめるため、そして人民の、人民による、人民のための、政治を地上から絶滅させないためであります。

5. 解釈の問題点

訳文は訳者がいかに原文を解釈して居るかをもっとも端的に示すものであり、原著者の精神をいかにつかんで居るかをあるがままに語っているものであるが、いまこの Lincoln の演説文の解釈について、上記高木、斎藤両氏の共訳に添えられた解説の一節を引用してみよう：——

……私は本演説の内容に触れて述べようとは思わない。それはなんびとも自ら味読すべきものである。

ただ一言、最後の一句「人民の、人民による、人民のための政治」について、卑見を述べて参考に供したい。これはいわゆる「デモクラシーの最良の定義」として普（あまね）く伝えられるところであるが、その中の「人民の政治」の意義については、不思議にもわが国においては二つの見解が対立する事実が認められた。すなわち一説はこれを「(目的格である)人民の上に行われる政治」と解するのであり、二説はこれを「(主体である)人民の行う政治」と見る。用例の点からいうと一説が有力のように思われる。リンカーンが愛読したと伝えられる牧師、講演家、著述家なるシオドア・パーカーの句に“Democracy is self-government, over all the people, for all the people, by all the people” というのがある。又リンカーン自身の「戦争教書」の中にも、“……whether a constitutional republic or democracy—a government of the people by the same people……can or cannot maintain……integrity……” という一句がある。そしてこれらは明（あきらか）に「人民の上に行われる政治」を意味するのである。しかし私は第二説をとる。リンカーンは「ピープル」という文字をとくに注意をこめて用いる人であった。前掲教書の場合は要するに人民による (by) の一点を強調した用例であるが、たんに「人民の政治」とのみ彼がいったとすれば、それは帝王や少数者の政治に対しての人民の行う政治の意味に解する方が、彼の思想をよりよく理解する解釈であると考えられる。「人民の政治」の語は、「平民の政治 (ポピュラー・ガヴァメント)」の語と同様に、人民の行いまたは人民の形作る政治——すなわち民主政治を意味すると解するのが、リンカーンと彼の代表するアメリカの思想の正当な把握と思われる。(例えば、リンカーンは「ピープルス・ガヴァメント」という文字を他のところで用いている。また後年になってからピープルス・パーティなどという政党名が現れたことなど、幾分参考になりはしまいか。) ことにこの場合には、リンカーンがとくに「人民の、人民による、人民のための政治」と三者を周到に用いた事実に鑑（かんが）み、その一つには事実上意義

を認めない解釈を私は取りえないのである。(人民の政治を地上から滅びないよりにするとの文字に活きた意義を認めたい。)文法の事はともかくとして、政治思想史から考えてみ、また政治の理論を述べる文章としてこの一句を解するには、第二説が正しいと思われるのである。

6. 高木氏の所論の分析

上掲の解説に「私は」と単数の代名詞を用いてあるところから、この部分の解説は「政治思想史」や「政治の理論」に特別の関心を有する高木氏の筆になったものと解する。

高木氏は“government of the people, by the people, for the people”の一句の中の“of”の用法に関し「不思議にもわが国においては二つの見解が対立する事実が認められた」というが、この「不思議にも」という一句に高木氏がこの問題には当然一つの見解しか成り立ち得ないものと考え、それが人民主権を表わす“of”であるという政治学者としての先入見に立っていたことが告白されて居る。この場合の“of”が客体を示す、いわゆる objective “of”であろうなどとは意外のことであつたのであろう。

そこで、明瞭な例証を示されてもなお政治学者としての先入見が捨てきれず、「用例の点からいうと一説が有力のように思われる」が、「文法の事はともかくとして」「私は第二説をとる」と飽くまで人民主権の既定概念に執着して居る。

その理由として「たんに『人民の政治』とのみ彼がいったとすれば、それは帝王や少数者の政治に対しての人民の行う政治の意味に解する方が、彼の思想をよりよく理解する解釈であると考え」というが、それは「たんに『人民の政治』とのみ彼がいったとすれば」という仮定の上に立っての話である。ところが事實は「たんに『人民の政治』とのみ彼がいった」のではなく、あとに『人民による』がついて居るのである。だから、この仮定上の立言は全く意味をなさない。Lincoln が他のところで“people's government”という文字を用いているといつても、そのあとに“by the people”がついて居ないでは、何の参考にもなりはしない。

また「リンカーンがとくに『人民の、人民による、人民のための政治』と三者を周到に用いた事実に鑑み、その一つには事実上意義を認めない解釈を私は取りえないのである」というが、“of the people”は立派に政治の客体たる人民を示し、“by the people”がこれを自から治むる主体たる人民を示しているのである。もし高木氏のように“of the people”を「(主体である)人民が行う」意味だとすれば、それこそ次につづく“by the people”の一句に「事実上意義を認めない解釈」となるのである。

こういう仮定上のナンセンスや自家撞著の解釈におちいるのも、高木氏が政治学者として人民主権の先入見に囚われて、あるがままの言葉の自然に随順する素直さを失って居るからである。

7. 第2の問題点

以上の“of the people, by the people”の問題は既に英語英文学の専門誌「英語青年」の第94巻に連続誌上をにぎわしたのであるが、これこそ「不思議にも」高木氏の解説にも触れられておらず、また一般の問題として論議的ともせられておらぬ第2の重要な問題点があって、これは英米の語学者や文法家自身誤った解釈をし、高木氏その他もろもろの邦訳もまたその誤りをそのまま無批判に踏襲しているからして、今回は特にこれを取りあげて論じよう。それは、この演説の結論に当る最後の部分の解釈にかかわる重要点であるが、その解明には Lincoln がこの演説を起草したその過程にまでさかのぼらねばならない。

8. 演説起草の過程

一時流布された伝説では、この演説は Lincoln が Gettysburg に向う途中の汽車中で草卒の間に起草されたということになって居たが、実際はこれと違って、草案は Washington の大統領官邸において既に着手されていたもので、恐らく2枚から成り立って居たものであろうという。その第2枚目は Gettysburg に到着後、David Wills 邸に過した18日の晩か、翌19日の朝に破棄されて、別の用紙に全く書き改められたと見られるのである。

それは、第1枚目が Executive Mansion の名の印刷された用紙にペンとインキでしたためられて居るのに、第2枚目は全く違った罫紙に鉛筆でしたためられ、第1枚目の最後の一句が、やはり鉛筆書きで消して書き改められて居ることから、十分に推察されるところである。

これが第一草稿であって、挿絵の自筆原稿複写にも示してある通り、次のように書いてある：——

Four score and seven years ago our fathers brought forth, upon this continent, a new nation, conceived in liberty, and dedicated to the proposition that "all men are created equal."

Now we are engaged in a great civil war, testing whether that nation, or any nation so conceived, and so dedicated, can long endure. We are met on a great battle field of that war. We have come to dedicate a portion of it, as a final resting place for those who died here, that the nation might live. This we may, in all propriety do. But, in a larger sense, we can not dedicate——we can not consecrate——we can not hallow, this ground. The brave men, living and dead, who struggled here, have hallowed it, far above our poor power to add or detract. The world will little note, nor long remember what we say here; while it can never forget what they did here.

It is rather for us, the living, (to stand here,) we here be dedica

[Second Page]

ted to the great task remaining before us——that, from these honored dead we take increased devotion to that cause for which they here, gave the last full measure of devotion——that we here highly resolve these dead shall not have died in vain; that the nation, shall have a new birth of freedom, and that government of the people by the people for the people,

shall not perish from the earth.

Executive Mansion,

Washington, 186 .

Four score and seven years ago our fathers brought forth, upon this continent, a new nation, conceived in liberty, and dedicated to the proposition that "all men are created equal"

Now we are engaged in a great civil war, testing whether that nation, or any nation so conceived, and so dedicated, can long endure. We are met on a great battle field of that war. We have come to dedicate a portion of it, as a final resting place for those who died here, that the nation might live. This we may, in all propriety do. But, in a larger sense, we can not dedicate—we can not consecrate—we can not hallow, this ground—the brave men, living and dead, who struggled here, have hallowed it, far above our poor power to add or detract. The world will little note, nor long remember what we say here; while it can never forget what they did here.

It is rather for us, the living, to ~~remember~~ ^{we here be dedicated}

ted to the great task remaining before us—
 that, from these honored dead we take in-
 creased devotion to that cause for which
 they here, gave the last full measure of de-
 votion— that we here highly resolve these
 dead shall not have died in vain; that
 the nation, shall have a new birth of free-
 dom, and that government of the people by
 the people for the people, shall not per-
 ish from the earth.

この第1草稿をもととして、Lincoln は更に第1草稿の第2枚目の用紙と同じ罫紙をつかって、今度は全部ペンとインキで第2草稿を作り上げたのである。そしてこの第2草稿を式場に持参し、これを手にささげ持って、あの不滅の名演説をおこなったという。その第2草稿は次の通りである (*Collected Works of Abraham Lincoln*, prepared by the Abraham Lincoln Association of Springfield, Ill. Rutgers University Press, 1953年版, 全9巻の内第7巻参照):—

Four score and seven years ago our fathers brought forth, upon this continent, a new nation, conceived in Liberty, and dedicated to the proposition that all men are created equal.

Now we are engaged in a great civil war, testing whether that nation, or any nation, so conceived, and so dedicated, can long endure. We are met here on a great battlefield of that war. We have come to dedicate a portion of it as a final resting place for those who here gave their lives that that nation might live. It is altogether fitting and proper that we should do this.

But in a larger sense we can not dedicate—we can not consecrate—we

can not hallow this ground. The brave men, living and dead, who struggled here, have consecrated it far above our poor power to add or detract. The world will little note, nor long remember, what we say here, but can never forget what they did here. It is for us, the living, rather to be dedicated here to the unfinished work which they have, thus far, so nobly carried on. It is rather for us to be here dedicated to the great task remaining before us—that from these honored dead we take increased devotion to that cause for which they here gave the last full measure of devotion—that we here highly resolve that these dead shall not have died in vain; that this nation shall have a new birth of freedom; and that this government of the people, by the people, for the people, shall not perish from the earth.

Lincoln は必ずしもこの第2草稿をそっくりそのまま朗読したものとは言えないが、しかしここに今日一般に流布されて居る Gettysburg Address そのものの姿を、ほぼそのままに見ることが出来る。

ただ Lincoln はその後さらに3回この演説の自筆 copy を作って今日に残して居る。その最後のもの——Bliss Copy として知られ、これが確定稿と見なされて居るもの——は次の通りである (*Abraham Lincoln; an exhibition at the Library of Congress in honor of the 150th anniversary of his birth*, published by the Library of Congress, U.S.A. 参照):—

Four score and seven years ago our fathers brought forth, on this continent, a new nation, conceived in liberty, and dedicated to the proposition that all men are created equal.

Now we are engaged in a great civil war, testing whether that nation, or any nation, so conceived, and so dedicated, can long endure. We are met on a great battle-field of that war. We have come to dedicate a portion of that field as a final resting place for those who here gave their lives that that nation might live. It is altogether fitting and proper that we should do this.

But, in a larger sense, we can not dedicate—we can not consecrate—we can not hallow—this ground. The brave men, living and dead,

who struggled here, have consecrated it far above our poor power to add or detract. The world will little note nor long remember what we say here, but it can never forget what they did here. It is for us, the living, rather, to be dedicated here to the unfinished work which they who fought here have thus far so nobly advanced. It is rather for us to be here dedicated to the great task remaining before us—that from these honored dead we take increased devotion to that cause for which they gave the last full measure of devotion—that we here highly resolve that these dead shall not have died in vain—that this nation, under God, shall have a new birth of freedom—and that government of the people, by the people, for the people, shall not perish from the earth.

この最後の草稿から、現在最も普通に流布して居る形のもので出来て来て居るものと考えられる。

9. 問題点の所在

さて、問題は Lincoln が起草した第1草稿第1枚目の末尾から第2枚目の終りまで——すなわち彼が Gettysburg へ来てからくり返し書き改めた部分——に存する。

第1枚目の末尾、彼は最初 *It is rather for us, the living, to stand here*, と書いたが、第1草稿において、この終りの *to stand here* という Infinitive を *we here be dedicated* という Clause に書き改め、更に第2草稿に及んで、この個所を *It is for us, the living, rather to be dedicated here to the unfinished work which they have, thus far, so nobly carried on. It is rather for us to be here dedicated* と増補して、*It is rather for us to be dedicated* の句を反復して、「われわれは此の戦場の1部を戦没者のための聖なる墓域として献げるためにこゝに来て居るのであるが、献げるといってもそんな力はわれわれには無い——寧ろわれわれこそ献げらるべきものなのだ、この勇士たちがいのちをさゝげて戦った未完の大事——分裂の危機に瀕する国家をすくい、その統一をますます固くするという戦争の終極目的——を完遂することに、むしろわれ

われこそ、この神聖なる式場において献げられなければならないのだ」という、この演説の大眼目をあきらかにしようと苦心したことがわかる。

そこまでは別に問題は無いが、問題はすぐそのあとに起って来る。そしてそれは、この書き直された部分と密接の関連をもつのである。それは、一般流布の形では――

It is rather for us to be here dedicated to the great task remaining before us――

の dash につづく5つの *that*-Clause. すなわち、分解して示せば――

- (1) *that* from these honored dead we take increased devotion to that cause for which they gave the last full measure of devotion;
- (2) *that* we here highly resolve
- (3) *that* these dead shall not have died in vain;
- (4) *that* this nation, under God, shall have a new birth of freedom; and
- (5) *that* government of the people, by the people, for the people, shall not perish from the earth.

となる。この5つの *that*-Clause の相互関係と、そのおのおのの意味するところが問題なのである。ただし、第3の *that*-Clause が第2の Clause の含む他動詞 “resolve” の目的語となる Noun Clause で、その“決意”の内容を示すものであるということは、誰が見ても明白で、この第3の Clause の解釈については問題が無い。

10. 英人 Ogden 氏の誤訳

Basic English で有名な英国 Cambridge 大学の C.K. Ogden 教授は、この個所を Basic English に書き直して、次の如き解釈を示して居る (C. K. Ogden: *Basic English and Grammatical Reform* 参照) :――

It is for us to give ourselves here to the great work which is still before us, so *that* from these dead who are in our hearts we *may take* an increased love of the cause for which they gave the last full measure of their love; so *that* we *may* here come to the high decision that these dead will not have given themselves to no purpose; so *that* this nation, under the Fa-

ther of All, *may have a new birth in the hope to be free, and so that government of all, by all, and for all, may not come to an end on the earth.*

すなわち、第1の Clause——*so that.....we may take.....*第2の Clause——*so that we may.....come.....*第4の Clause——*so that this nation.....may have.....*第5の Clause——*so that government.....may not come.....*と、これら4つの *that*-Clause がおのおの並列関係に立って、どれもみな、“*so that.....may*” が示すように、Adverb Clause of Purpose である、としている。

しかし、これはとんだ大間違いである。原文の簡潔、蒼古の言葉つかいを忠実に見ないところから来た大誤訳である。原文5つの *that*-Clause に用いられて居る動詞の形に注意せよ。第1は *that.....we take.....*第2は *that we.....resolve.....*であるに対して、第3は *that these dead shall not have died.....*第4は *that this nation.....shall have.....*第5は *that government.....shall not perish.....*となつて居て、第1と第2が同型、第3、第4、第5がまた別種の同型をなして居ることは、なんびとの目にも明白である。すなわち、第1と第2は並列に立つ Clause で、第3、第4、第5はまた別の関係において並列に立つ Clause なのである。しかるに、Ogden 氏は、第3を除く4つをみな同じ関係において並列せしめている。

さて、第3の *that*-Clause が第2の含む“*resolve*”の目的語として、その“決意”の内容を示す Noun Clause であることは既に見た通りであるから、この第3と同じ関係において並列する第4、第5の両 Clause も同じく第2の Clause の含む“*resolve*”の目的語として、その“決意”の内容を示す Noun Clause であることは明白である。しかるに Ogden 氏は、これら第4、第5を第3とは異なった Adverb Clause of Purpose として第1、第2に並列せしめて居るのであるから、全く見当ちがいの大間ちがいをして居ると言わざるを得ないのである。

11. 米人 Tanner 氏の解釈

アメリカの各種の学校で広く英文法の教科書として用いられたものに Geor-

ge L. Kittredge, Frank E. Farley 両教授共著の “*A Concise English Grammar*” という本があるが、この本の附録として William M. Tanner 氏が多くの文法問題を挙げてその解釈を示して居る。そのなかに此の Lincoln の演説がかかげられ、例の問題の5つの *that*-Clause について、さすがに、あとの第3, 第4, 第5の3つが同じ関係で並列し、第2の含む動詞 “*resolve*” の目的語としての Noun Clause であると教えて居る。この点は正しい解釈で、英人 Ogden 氏の大間違いに比し、遙かにまさっているといわなければならない。

しかし、第1と第2の Clause を第3, 第4, 第5と区別して、別類の同一関係に並列させるのはよいのであるが、これを Ogden 氏と同じく Adverb Clause of Purpose と規定して居ることには疑問がある。恐らく、アメリカの中学生、高校生らはみなこのように教えこまれて来て居るのであろうが、また日本で出来た各種の高校用英語教科書でも同じくこの解釈を採用した脚註を見かけるから、日本の高校生たちも同様に教えこまれて居るものと思われるが、実は、この解釈は根本的の誤りであると考えられるから、それを次に述べてみよう。

12. 正解への手がかり

第1には、挿絵として入れてある Lincoln 自筆の第1草稿を見ていただきたい。その第1枚目の終りが *It is rather for us, the living, to stand here, we be dedica-* と Infinitive から Clause に書き直してある。ここに正解への手がかりが与えられて居る。すなわち、これを意味をとって書き直せば *It is rather proper or necessary that we should be dedicated* (むしろわれわれこそささげらるべきが至当である) となる。この原文に “*we be dedicated*” と、いわゆる Subjunctive Present の動詞形が用いられて居ることに注意ありたい。

さて次に、第2草稿で書き改められた場合の *It is rather for us to be here dedicated* を第1草稿の例にならって Infinitive を Clause に書き改めれば *It is rather we be here dedicated*. すなわち更に前の場合同様に書き直して、*It is rather proper or necessary that we should be here dedicated* となる。

今度は、第1草稿の句読法に従って、この個所を次のように書き改めてみた

らどうであろう：——

It is rather *that we be* here dedicated to the great task remaining before us——*that* from these honored dead *we take* increased devotion to that cause for which they gave the last full measure of devotion——*that we* here highly *resolve*.....

あきらかに、この場合、第1の *that we be* dedicated.....第2の *that*.....*we take*.....第3の *that we*.....*resolve* が全く同型の Clause として並列し、第2の含む動詞 “take” も第3の含む “resolve” も第1の “be” と同じ Subjunctive Present の形で、It is rather *proper or necessary that we should be* dedicatedIt is rather *proper or necessary that we should take*.....It is rather *proper or necessary that we should resolve*..... と書き直さるべき関係にあることが明白になると信ずる。

すなわち、Lincoln の演説の原文にもどって、問題の第1 Clause—*that* from these honored dead *we take*も、第2 Clause—*that we* here highly *resolve*も共に、文頭の It に代表され、これと Noun in Apposition に立つところの Noun Clause であって、Adverb Clause of Purpose と見ることは間違いであると考える。

13. 正解の裏づけ

形の上から言えば、Lincoln の第1草稿の句読法が

It is rather for us, the living, we here be dedicated to the great task remaining before us——*that*, from these honored dead we take increased devotion to that cause for which they here, gave the last full measure of devotion——*that we* here highly *resolve*.....

となって、この問題の2つの Clause をみちびく接続詞 “that” の前が、どちらも dash [——] のしるしで結ばれて居るに対して、後続の3つの Clause をみちびく “that” は——

.....*resolve these dead shall not have died in vain;that the nation, shall*

have a new birth of freedom, and *that* government of the people by the people for the people, shall not perish from the earth.

となつて居て、第1 Clause の “*that*” は省略され、第2の “*that*” の前は semi-colon [;] のしるしで区切られ、第3の “*that*” は comma [,] と “*and*” で結ばれて居て、この点、先出の2つの “*that*” が dash [—] で結ばれて居たのと、はっきり区別されて居る。

意味の上から言えば、元来 Lincoln のこの演説全文の大意は「戦没者のために墓地を浄め、献げるために自分たちはここへ来て居るのであるが、実は、浄められ献げらるべきはわれわれ自身である。われわれこそ、この戦没者たちによって浄められた聖地に立って、未完の大業に献身すべきことを誓わねばならぬ」というのであって、この全文の大意からこの最後の一節の文章を構造的に分解すれば、次のような3段に段落が分たれる：—

(1) It is rather for us to be here dedicated to the great task remaining before us (前途に残つて居る大事にわれわれこそここで献げらるべきである)——(2) that from these honored dead we take increased devotion to that cause for which they gave the last full measure of devotion (これら名誉ある戦死者から、われらこそ、彼らが最後の血の1滴まで献身の至誠をかたむけつくしたその大義のために一層献身の至誠をつくすまごころを受けなければならない)——(3) that we here highly resolve that these dead shall not have died in vain; that this nation, under God, shall have a new birth of freedom; and that government of the people, by the people, for the people, shall not perish from the earth (これら戦死者の死をむだにさせないよう、神のみ蔭によりこの国をして新たに自由の国として生れかわらせるよう、そして人民みずから人民のために人民を治める政治をこの世から滅び去らしめないよう、われわれこそここに、まごころこめて誓いあわねばならぬ)

すなわち、第1段は未完の大業への生者の献身、第2段は戦死者が身命をささげて尽した大義への一層の献身、第3段は戦死者の遺志を継いで、合衆国を崩壊から救い、その建国の精神を示す国体をあくまでも護持する固い誓い、を

述べたもので、それは同じこの演説の主旨を3段に分けて、1段より2段、2段より3段と、次第に詳しく一層具体的に、くりかえして強調したものである。すなわち、この3段は同一事の反復強調であって、意味上、全く同型の並列関係に立つものである。

14. 誤訳の因由

なぜ英米の学者までがこのような読みちがいをしたのか、と考えると、それは第1に Lincoln がこの演説の起草に当って、切角1度は“*to stand here*”という Infinitive を“*we here be dedica-*”と Clause に書き改めながら、結局は“*It is for us, the living, rather, to be dedicated here..... It is rather for us to be here dedicated.....*”と、再び元の Infinitive にもどって、それに後続の *that*-Clause を並列的に結びつけたところに、やや文体上無理が出来たこと、更に後の copy に際して、5つの *that*-Clause のうち第3のものを除いてあとの第1、第2、第4、第5を、それぞれ一様に dash [—] で結んで、あたかもこれら4つの *that*-Clause が全く同じ意味の並列関係に立つものの如き外観を呈せしめたこと、更には一般に流布して居る形では、第1の *that*-Clause の前だけが dash [—] で結ばれて、あとは第3を除き、すべて semi-colon [;] で区切ってあって、第1と第2の並列関係と、第4と第5の並列関係とが、異なった意味においてのものであることが明瞭に示されて居らないこと、以上3点のために、広く誤解乃至誤訳を招く結果となったものと考えられる。

15. 誤訳そのままの誤訳

そこで本題へもどって、前にかかげた高木、斎藤両氏の、この最後の1節の邦訳を見ると――

「われわれの前に残されている大事業に、ここで身を捧げるべきは、むしろわれわれ自身であります――それは、これらの名誉の戦死者が最後の全力を尽して身命を捧げた、偉大な主義（コース）に対して、彼らの後をうけ継いで、われわれが一層の献身を決意するため、これら戦死者の死をむだに終ら

しめないように、われらがここで堅く決心をするため、またこの国家をして、神のもとに、新しく自由の誕生をなさしめるため、そして人民の、人民による、人民のための、政治を地上から絶滅させないため、であります。」

と、「それは……決意するため……決心をするため……誕生をなさしめるため……そして……絶滅させないため、であります」と4回も「……ため……ため……ため……ため」をくりかえして、全く、前に指摘した英人 Ogden 氏の大間違いの “so that……may take……so that……may come……so that……may have……so that……may not come” と Adverb Clause of Purpose を並列的に4つくりかえした誤訳を、無批判にそのままうけいれた大誤訳となって居る。これでは地下の Lincoln もあきれざるばかりで、これがわが国最高の学府と仰がれる東京大学の、代表的の英米政治学の権威と英米文学の専攻学者との協力に成る訳文かと思えば、ただただ日本人として赤面痛嘆のほかなく、Lincoln の胸中を思って真にたえがたい心地がする。

16. 正訳へのところみ

そこで、つたなき身におうけなくも、この Lincoln 愛国の至誠の余音を、やまとことばにひるがえす、正訳へのところみをくわだてよう。1歩でも2歩でも、この不滅の名演説の正しい邦訳へ近づくよすがともなればとねがうが故である。

「今は八十有七年の昔、わたくし共の親たちはこの大陸に、自由を母とし、“万人は生れながらにして平等なり” という命題を建国の理想とする、あらたなる国を生み成しました。

いまわたくしどもは、その国が、またいつこなりと苟くもそのごとき由来をもち、そのごとき理想に立つ国が、永く存続し得るや否やをためす一大内戦に従事して居ります。その戦争の一大決戦場に、わたくしどもは今あつまって居るのでございます。わたくしどもは、その戦場の一部を、この国を救わむがためにそのいのちをすてた人々の永遠(とわ)のやすらぎの場所として献げるために参って居ります。これはもとよりわたくしどもの当然なさね

ばならぬところでございます。

しかし、さらに大いなる意味におきましては、わたくしどもにはこの土地をささぐる力はありません——はらい浄める力はございません。ここに戦われました勇士たちが、戦死者生存者のわがちなく、共にこの土を浄められたのでありまして、これにいささかも増減することは、わたくしどもの微力の決して及ばぬところでございます。世の人たちはここでわたくしどもが申す言葉をあまり気にもとめず、また永く記憶しても居りますまい。けれども、あの勇士たちがこの地において立てられたいさおは、永久に忘れられよう筈はございません。ここに戦った人たちが、かくも立派にここまで推しすすめて来られました未完成の仕事にわれわれ生きて居る者こそむしろ、献げられねばならぬものでございます。むしろわれわれこそ此の地において、わたくしどもの前途に残って居る大事業に献げられなければなりません——これら名誉ある戦死者から、その方々が最後のひといきまでまごころをささげ尽されましたあの正義のため、いよいよ忠をはげます献身の熱情を、わたくしどもこそ受けただかなければなりません——これら戦没者の死をあだにはさせまじ、この国を神のみ蔭のもとにふたたびあらたに自由の国とし生れ変らせ、そして人民のために人民自から人民を治めるといふ政治を、この世から滅び去ることあらしめまじと、わたくしどもこそここにまごころこめて誓いあわさねばなりません。」

GETTYSBURG ADDRESS の邦訳について (追補)

以上執筆後に開かれた研究発表会席上、問題の*that-Clause* は、前の“*great task*”の内容を言って居るものではないか、という意見が提出されたので、その点について一筆補足することにした。

この意見は、学習院大学の渡辺教授の「英語の教養」に収められた *Gettysburg Address* の「註解」にも支持されて居り、深沢正策氏もその著「リンカーン自叙伝」(万里閣発行)の中で次のように訳して居る：——

「われわれの前に残された大事業にたいして、ここにささげらるべきは彼等よりも寧ろわれわれであり、かの名誉ある戦死者たちが最後の忠誠を残らなくつくしたところの大義にたいして、われわれがより高められた忠誠を受けつぎ、これら戦死者の死を空しくせざることを深く決意し、神の守護の下に此の国に自由の新しい誕生を得せしめ、そうして民衆により民衆のための民衆の政府を地上から消滅せしめぬことこそ、その大事業なのである。」

この訳でみると、「……忠誠を受けつぎ……深く決意し……誕生を得せしめ……消滅せしめぬ」という4箇条が「大事業」の内容となって居るが、「忠誠を受けつぎ……深く決意し」の2項は「大事業」への心構えであって、「大事業」そのものは「戦死者の死を空しくせず……此の国に自由の新しい誕生を得せしめ……民衆の政府を地上から消滅せしめぬ」という3項に存するのである。

Lincoln の原文で言えば、“*the unfinished work which they who fought here have thus far so nobly advanced*”と“*the great task remaining before us*”と“*that cause for which they gave the last full measure of devotion*”とが同一事をさし、その内容が最後の3つの *that-Clause*、即ち“*that these dead shall not have died in vain; that this nation, under God, shall have a new birth of freedom; and that government of the people, by the people, for the people, shall not perish from the earth*”で言い表わされて居るのである。

この「大事業」に自分たちが「献げらるる」とは、すなわち、自分たちがここで「戦死者たちから忠誠を受けつぎ」、この大事業を貫徹して戦死者たちの志を遂げしむることを「深く決意」することにほかならぬのである。

Lincoln の原文で言えば、“to be here dedicated”（第1草案では *we here be dedicated*）と “*we take increased devotion*” と “*we here highly resolve*” とが同一の心情を表白した言葉と解せらるるのである。